

第 23 回、8・8 平和を考える長崎集会宣言

- ①、1945 年 8 月 6 日、広島への原爆投下で、国(内務省)はこれを原子爆弾とは呼ばず「新型爆弾」として、「敵の一機にも油断は大敵。防空壕に退避し、布団を被れ」と、9 日の新聞に報じさせた。国の使命は国民の命を守ることが第一義であるが、日本は原子爆弾の情報を隠し、国体(天皇制)護持を最優先に、戦争を続け、その 9 日に長崎は原爆で市民の 7 万余が被爆死する。
- ②、そのとき被爆した井原東洋一さん(長崎原爆被爆者手帳友の会代表)は、闘病の甲斐なく、7 月 30 日に逝去された。83 歳。合掌。このように被爆者や二世、三世などにとって、先の戦争と原爆の影は、いまなお現在の問題であり、戦争も終わっていない。
- ③、大戦後の 1948 年、第 3 回国連総会は世界人権宣言を採択し、第一条で「全ての人は、生まれながら自由で、尊厳と権利について平等である」とうたう。以来 74 年、世界には国連の平和主義を否定する自国第一主義が台頭し、世界中に「隣国が攻めてくる」とする戦争論があふれている。
- ④、戦後、日本では非戦を誓った国民も、いま多くが嫌中、韓、朝、口論にある。この変化は 1970 年代のオイルショック(高度成長の破たん)を契機にした、会社の思想攻撃=「事業危機論」に取り込まれた労組が協調主義をとり、労働者がたたかいを放棄したことに始まる。これに学んだ国は、国民支配の手段として、自然災害、経済、政治の危機を語り、「自分の命は自分で守れ=自己責任論」と煽る。この結果、日本は日常的に非常事態(戒厳令)が発動され、国民は協調・従順の民と化す。
- ⑤、1649 年、人類で初めて議会の力で王を処刑し、共和制を立国したイギリス革命のころの哲学者のジョン・ロックは、国民主権を語り、国が国民の意に沿わない政治を行ったときは、その国を変える=革命・抵抗権の存在を示し、これがアメリカ独立宣言やフランス革命へとつながり、現代世界の立憲・民主主義の源流となる。
- ⑥、いまこの戦後世界の流れを嫌うトランプは、自国ファースト(極右の国家主義)を掲げ、イランの挑発による中東危機を語り、有志連合での中東戦争を企てている。その背景にはイスラエルの意図があり、彼らは神話の世界の旧約聖書の大義(神がこの土地を与え給うた)と、選民思想にたつ。
- ⑦、しかしだ。もし神がおられ、彼らが大義を語るならば、私たちはこう答える。近代立憲主義の祖のジョン・ロックや世界人権宣言にいう「人は自由であり・・・」は、そもそも旧約聖書の神の言葉(平等論)からの引用であり、そのときの神は、同時に人類に 10 の戒め(十戒)を説き、「殺すな、盗むな、ウソをつくな、隣人のものをむさぼるな」とした。これこそ神がいう人の正義なのであり、トランプやイスラエルはこれに背き、神を語る資格すらない。
- ⑧、世界の国と人類史の教訓でいうなら、国の危機を煽り、戦争へと舵を取り、国民の命や財産を守れない国は、最終的に国民の信頼を失い、歴史の表舞台から必ず退場している。なぜなら、人がまずあり、国や王権や政治体制は、人々が決めることだからだ。
- ⑨、いま私たちが選択すべきことは、国か人かであり、私たちは主権が人に存し、隣国と争わない、殺さない立場をとること=人間ファーストに立ち、極右の国家主義をとたたかうことである。

私たちは第 23 回の 8・8 集会に集い、沖縄、広島、そして全国の思いを受け継ぎ、反戦・反核・平和を、ひとり一人の思いとしてたたかい続けることを誓う。

2019 年 8 月 8 日

第 23 回、8・8 平和を考える長崎集会